「マリヤーデが欲しいのよ」

ಮರಿಯಾದೆ
mariyāde　マリヤーデ

ಅವರಿಗೆ ಮರಿಯಾದೆ ಇದೆ
avarige mariyāde ide　アワリゲ マリヤーデ イデ（彼女は尊敬に値する）

ನನಗೆ ಮರಿಯಾದೆ ಬೇಕು
nanage mariyāde bēku　ナナゲ マリヤーデ ベーク（わたしに尊厳をちょうだい）

●お手伝いさんの世界

インドでお手伝いさんの世話にならないことは難しい。日本でお手伝いさんがいるなどと聞くとどんなお金持ちなのかと驚いてしまうが、インドの中流家庭であれば、朝晩、掃除や炊事の手伝いをしてくれる女性がいるのは当たり前のこと。それはまた、貧富の差がまだ根強くあることの証でもある。

わたしが王族の調査のために南インドのマイソール市で暮らしているあいだ、下宿先や友人宅、そして直接わたし自身が雇う事を通じて、何人ものお手伝いの女性たちと親しくなった。彼女たちはわたしの身の回りの世話をしてくれただけでなく、ことば遣いや礼儀作法、そして土地の風習や宗教儀礼について教えてくれた先生でもあった。

彼女たちの多くは学校教育を受けていないが、普段は男性とも同等にやりあうほど堂々としている。しかし、値札が読めないからスーパーに行くことができないし、文字を知らないのでガスの契約をすることもできない。書かれた文字の世界ではすっかり萎縮してしまうのだ。

●彼女にはマリヤーデがある

マハーデーヴィはわたしの知り合いのお手伝いさんのなかでももっともやり手の女性だ。タクシーの運転手をしていた夫が若い女性と夜逃げしてしまったが、その後もめげる事なく年老いた叔母と四人の子どもの世話をしていた。夫の浮気についてわたしにこぼしながら、「でもそんな夫ならいらないじゃない？」と言って、にやりとしたのが印象的だ。彼女は情に厚く、仕事をなくした女性に別の家庭を紹介したり、雇い主からセクハラにあった女性をそっとかばったりしていた。わたしは当時、植民地時代に藩王であったマハラジャが聖者などに敬意の印として贈る儀礼的な籠や傘などに興味をもっていた。こうした物品はマリヤーデmariyādeとよばれるのだが、マリヤーデの別の意味に遭遇したのは、お手伝いの女性たちがマハーデーヴィについて語っていたときだった。彼女たちは「マハーデーヴィにはマリヤーデがある」と言ったのだ。日本語に訳せば、「尊敬に値する女性だ」といったところか。

●わたしはマリヤーデが欲しいのよ

次にマリヤーデの表現を聞いたのは、若いお手伝いの女性リーラからだった。リーラは、恋仲だった男性を追ってマイソールにやって来て、彼が運転手をしていた家庭に住み込みのお手伝いとして働いていた。いわば押しかけ女房であった彼女は、ある日妊娠していることに気づく。しかし、リーラのカーストが彼氏のカーストよりも下だったため、彼氏の家族は大反対。リーラは結局、中絶することに同意させられる。さらに手切れ金の話まで出ていたようだ。仲間の女性たちが泣きじゃくる彼女を慰めているときに、リーラはこう叫んだ。「わたしはお金なんていらない。マリヤーデが欲しいのよ。」マリヤーデ、尊厳をくれということだ。男性の世界のマリヤーデが政治的地位を示す物質的なものなのに対して、下層の女性たちのマリヤーデには、形がない。

翌年、リーラに会うと、運転手の彼氏と結婚し以前よりもふっくらとしていた。噂に聞くと、お手伝い仲間たちが彼氏をうまく説得したらしい。

池亀彩
人間文化研究機構地域研究推進センター研究員
現代インド地域研究拠点研究員
専門は社会人類学。南インド、マイソール藩王国のマハラジャに関する歴史人類学的研究から最近はヒンドゥー教の聖者グルに関しての調査をおこなっている。

わたしの現在のお手伝いさんと家族。彼らは他州からの移民

下層の女性たちはとても信心深い

マハラジャが貴族の結婚式にマリヤーデとして贈った象